

# 今後の展示の基本的な考え方

## 1 はじめに

富山市科学博物館は、「富山の生活と文化を育んでいる郷土の自然とは何かを、また、自然と共に生きる人間のあるべき姿とは何かを、市民と共に思考し、自然と調和した新しい文化の創造を志向する場<sup>\*</sup>」としての役割を担うべく、昭和54(1979)年 11 月に「富山市科学文化センター」として開館した。開館以来、誰もが学べる社会教育・生涯学習の拠点、学校教育を支援する場として子どもから大人まで多くの方に利用され、累計観覧者数は、令和4(2022)年 8 月に 400 万人に達した。

しかしながら、自然と人間の関わり方を市民と共に考え続けていくためには、後述する時代の潮流に対応する展示が必要である。さらに当館は展示の老朽化の問題も抱えていることから、財源が限られていることを考慮しつつ、これからの時代にふさわしい常設展示のあり方を考えていく必要がある。

※富山市科学文化センター「理念および運営方針」(富山市科学文化センター, 1979)

### 富山市科学博物館の理念と使命

#### 理念

富山市科学博物館は、市民の自然科学への関心と理解を深め、学習を支援し、市民生活の向上に貢献します。

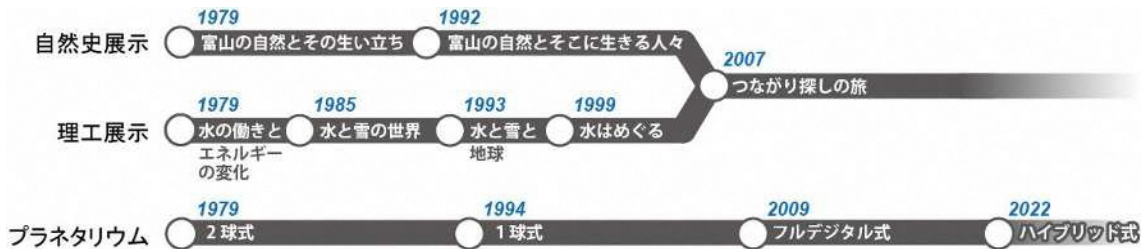
#### 使命

- ・自然科学の総合博物館として、知的財産の継承を行うとともに郷土の自然の特性を解明し、自然科学の普及、理解向上に寄与します。
- ・郷土の拠点となる自然科学系総合博物館として、関連する施設と連携しながら、幅広く富山の特性を生かした資料収集・調査研究・展示・普及教育の活動を行っていきます。
- ・富山の自然を中心とした多様な実物標本・文献などの資料を、市民の貴重な知的財産として未来に伝えていくため、積極的に収集し、将来にわたって活用が可能なように整理保管を行うとともに、郷土の自然の特性を解明するなど、調査研究を進めていきます。
- ・市民と自然科学との橋渡し役を担うべく、多様な展示や普及活動を展開し、特徴ある郷土の自然から宇宙まで広く自然科学について認識を深め、自然と共にある人間の姿を考えていきます。

## 2 展示のあゆみ

昭和54(1979)年の開館以降、理工展示を3回、自然史展示を1回更新し、その後平成19(2007)年に理工・自然史展示を同時更新し、現在に至る(図)。現在の展示は、「つながり探しの旅」をテーマとし、郷土の自然や身近な現象から自然の仕組みをさぐり、科学のおもしろさを来館者に実感してもらうこと、また私たちが豊かな自然の中に暮らし、自然のつながりに支えられていると気づき、知ってもらうことを目的としている。

プラネタリウムは、令和5(2023)年3月に光学式投映機とデジタル式投映機の両方を備えたハイブリット式として、リニューアルオープンした。併せて天文展示も更新した。



科学博物館の展示・プラネタリウムの更新年度とテーマ

### 3 変化する時代の潮流

平成19(2007)年の展示更新から15年が経過し、市民生活や博物館をめぐる状況は大きく変化している。

#### (1)人間活動により変化し続ける自然環境

私たちの生活が物質的に豊かで便利なものとなる一方、人類が豊かに生存し続けるための基盤となる地球環境は変化し続け、それに伴い新たな問題が生じている。

例えば、増え続ける温室効果ガスにより地球温暖化が進んでいる。大気中の水蒸気量が増えることで線状降水帯など局所的な大雨が発生しやすくなり、近年、各地に甚大な被害をもたらしている。海ではプラスチックを主とする海洋ごみが増え続け、マイクロプラスチックによる海洋汚染が深刻になっている。また、中山間地域では急激な人口減少に伴い、耕作放棄地が増加し、その結果、クマ・サル・イノシシなどの野生動物が人の生活圏へ進出したり、里山地域で育まれていた生物多様性が喪失したりするなどの問題が生じている。

以上のような問題は、自分とは無関係の、遠くの出来事のように捉えがちであるが、私たちの暮らしと密接に関わっている。地球環境の悪化や生態系のバランスの崩壊は私たちの生活に直結し、大きな影響を及ぼす。自然科学系博物館は、人と自然の共生について市民とともに考え、行動を生み出す役割を担っている。

#### (2)持続可能な社会へのシフト

気候変動やエネルギー問題、生物多様性の消失など、人は数多くの課題に直面しており、持続可能な社会の実現は、日本だけでなく世界共通の目標となっている。本市も「SDGs 未来都市とやま」をスローガンに掲げ、様々な取り組みを実施している。

持続可能な社会の実現のためには、変化し続ける自然環境と人間社会の課題を適切に理解し、科学的に考え、合理的に判断できる能力(科学リテラシー)が求められる。社会教育・生涯学習の拠点である自然科学系博物館は、子どもから大人まで広く市民の科学リテラシーを高める拠点としての役割を担うことができる。

また、郷土の自然に関する研究や展示・普及教育といった博物館としての基本的な機能は、持続可能な社会の実現のために必要な生物多様性の保全の面で、より重要度が増している。

### (3)IT の進歩と直接体験の減少

スマートフォンやタブレットといった情報端末が普及し、様々なコンテンツが提供され、誰もが多くの知識・情報を手軽に得ることができるようになった。またコロナ禍によって、リモートでの会話や会議が普及し、イベントなどもオンラインで実施され、時間やお金をかけずに、遠方の人も気軽に参加できるようになった。しかしその反面、実物に触れる機会や人と人が対面で会話をするといった直接体験の場が減少している。

文部科学省が提唱<sup>※</sup>しているように、体験活動は、豊かな人間性の構築、自ら学び考え生きる力の基盤、成長の糧となるとともに、五感を働かせて物事を感覚的にとらえることで感性を養う場となる。オンラインでのイベントなどが普及した時代だからこそ、時間やお金をかけてでも体験をしたいという人々の欲求は高まっており、直接体験の場としての博物館の役割が高まっている。

※体験活動事例集－体験のススメー(文部科学省, 2008)

## 4 展示の現状

### (1)時代の潮流への未対応

現在の常設展示は、平成14(2002)年4月の展示構想策定から20年が経過しており、時代の潮流への対応が必要となっている。

地球規模の環境・気候変動やそれに伴う災害の発生、生物多様性の低下、動物と人との軋轢などは、持続可能な社会をつくる、つまりは幸福な未来をつくるための解決すべき課題であるが、現展示にはこれらの話題がほとんど提示されていない。

当館には、来館者がこれらを自分の生活にかかわる課題として捉え、未来を考え、他者と対話して考えを広げ深める展示が必要である。また、課題を考え解決する力の基盤を涵養するため、疑問に思う力や問題を発見する力、探究する力、論理的に考える力を養う展示が多く必要である。

### (2)科学の進歩を反映することの限界

自然科学系博物館の使命のひとつである科学リテラシーの育成には、まず市民に自然科学の情報を正しく伝えることが重要であり、これが博物館に対する信頼の基盤となる。しかし、現展示の内容は構想から20年が経過し、下記の課題が生じている。

科学の進歩に伴い、解説内容の一部を修正する必要がある。例えば、地質時代の一つである第四紀の年代が変わった(2009年)。そのため、パネルを何か所もテープで修正し対応しているが、これらの修正は、まるで誤植があったかのような、低級な印象をもたらしかねない。

また、県内でも科学の新知見がいくつもある。例えば、日本最古の鉱物(2010年)、立山で現存する氷河(2012年)、世界で最も若い露出花崗岩(2013年)、新種アンモナイト(2021年)の発見などは、学術的に重要な新発見である。また、新たに確認された外来生物(アライグマ、ツヤハダゴマダラカミキリ、セアカゴケグモ等)や絶滅危惧種(イヌワシ、ゲンゴロウ、サギソウなど)の問題もある。これらの話題は、ロビー展や出版物・学芸員による展示解説等で取り上げ紹介したりもしているが、こうした方法による話題の提供では受け手の人数に限りがある。

知識を正しく伝えることはもちろん、重要な科学の新知見を伝えることは、市民が富山の自然へ関心を持ったり、誇りを持ったりするきっかけにもなる。しかし新しい話題を取り上げるには、展示物そのものを変更する必要性やスペースの問題が生じる。そのため、誰もが易しく理解できるように工夫を凝らした実物や模型、装置類を用いた展示形態で新知見を紹介することによって、これからも市民から信頼され、愛され、利用される博物館となることができる。

### **(3)展示物の老朽化による故障の頻発と教育効果の減少**

現展示には平成11(1999)年の更新時から 20 年以上使い続けている装置類(雲のシアター、ダイヤモンドダスト、水で切るなど)があり、平成19(2007)年に設置した装置類も含め故障が頻発し使用できない展示物が常に複数ある。可能な限り学芸員自身が修理を試み、また、業者による修繕も行っているが、修理部品の入手が困難な装置も増えてきており、修理だけでは対応しきれなくなっている。また、床地図や解説パネルには、傷や汚れがついたり、色あせしたりしているものがあり、展示で見たいもの、伝えたいメッセージが分かりづらくなっている。

これらの展示の老朽化・故障により、現展示の魅力と教育効果が大きく減退していることから、展示の更新が必要とされている。

## 5 新展示の基本的な考え方(案)

博物館は生涯学習の拠点であり、生涯学習の基盤を作るのが学校教育である。そのため博物館と学校は、それぞれの教育機能を活かして連携・協力し、よりよい形で次の時代を担う子どもたちの教育を押し進めていくこと(博学連携)が求められている。

当館は社会教育施設、すなわち誰もが学べる「もう一つの学校」として、新展示には、現在の学習指導要領の重点である「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れるものとする。そして、前述した時代の潮流と展示の現状等を踏まえ、富山の自然と自然現象を核とした展示の中で、見て、触れて、感じることをとおして、次の4つのねらいを達成し、展示のテーマ「つながりさがしの旅」を強化する。

### ■自分ごととしてとらえる

自然環境の変化に伴う問題が、自分と関係することに気づく。

### ■考える力を身につける

疑問に思う力、問題を発見する力、探求する力、論理的に考える力を身につけられる。

### ■自分で考える

問題に対して、自分がどうすべきかを主体的に考えられる。

### ■人と対話して考える

他者と対話し、様々な意見を受け入れ、自分の考えを広げ、深められる。